



教育力向上福岡県民運動
シンボルマーク

教育力向上福岡県民運動 ワンポイント・リーフレット

第13号

異年齢交流活動（縦割り活動）

～ 中学校の取組 ～

平成22年3月



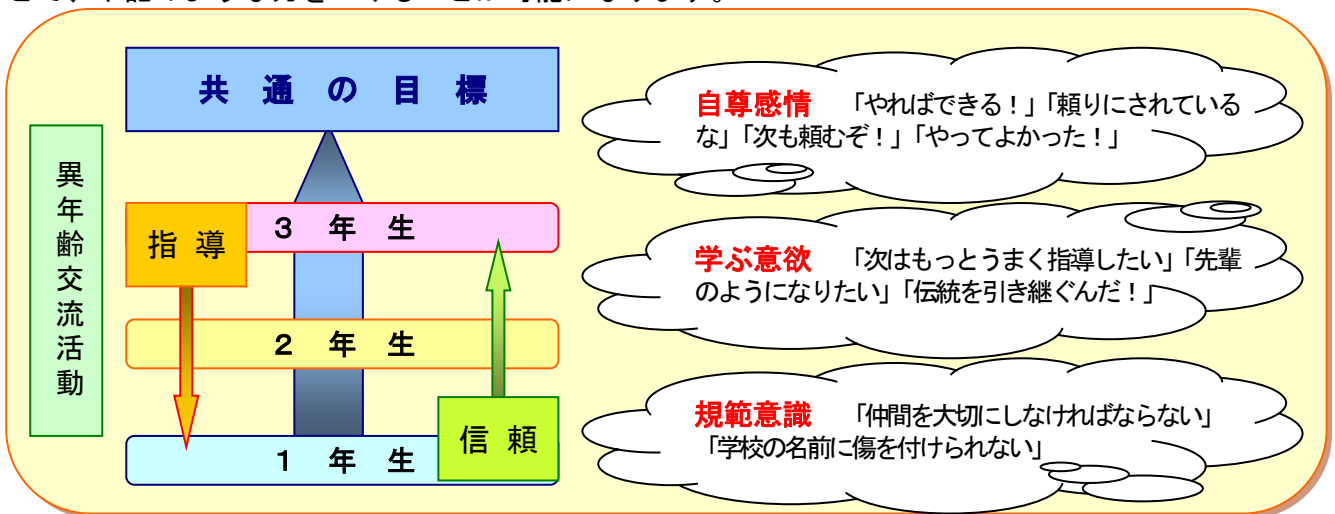
近年の少子化、子育ての価値観や地域の教育力の変化に伴い、子どもたちの異年齢での集団遊びが目立って減ってきました。それにより、子どもが集団遊びで自然のうちに身に付けてきたコミュニケーション能力や自尊感情、社会性、規範意識、体力等を育む機会が減少しています。これら自尊感情や社会性、規範意識等の低下は、自分に自信をもてずに周囲に必要以上に迎合し、公共のルールやマナーを守れないなど、TPO（Time；時、Place；場所、Occasion；場合）を考えない行動が増えることにつながっています。

今回は中学校で異年齢による交流を意図的に仕組み、自尊感情等を育むのに効果的な活動とするために留意するポイントをまとめました。

1. 異年齢交流活動の意義

学校生活や部活、放課後にはそれぞれのスケジュールと、今の中学生は忙しく、同年齢の仲間と遊ぶことすらままならない実態があり、異年齢との交流となると部活動が主なものになります。

中学校で異年齢交流活動を仕組む場合、3年生がリーダーとなり、上級生が下級生を繰り返し指導する機会を設定し、共通の目標に向かって活動をやり遂げさせることが必要となります。そのことで、下記のような力をつけることが可能になります。



2. 異年齢交流活動を仕組むコツ



① 活動に共通の目標を持たせましょう

活動に目標を持つことの意義を生徒に理解させた上で、共通の目標を設定し、目標を達成するために必要なことを共有しながら活動させると、生徒の取り組む姿勢や成果も大きくなります。

例えば、体育祭では学年縦割りのブロック別対抗戦形式をとっている学校も多いでしょう。「ブロックの優勝」を大きな目標にすると、そのために必要なこと、つまり小さな目標（競技中は大きな声で応援する、力を出し切る、応援合戦では自分の役割を果たす…）が生徒の側から考え出されます。小さな目標をクリアしていきながら、時には振り返り、小さな目標を設定し直したり、手段を改善するなどして大きな目標に向かっていくことが大切です。もちろん推進役は3年生です。3年生がリーダーとなって目標を決めさせていくことは必須です。





② 継続的な異年齢交流活動となるようにしましょう

お互いのことをよく知らないまま一緒に活動しても、充実感や所属感はなかなか得られません。そのことは研修会や講習会、地域の活動等で初めてグループを組んで活動したことがある方はよくお分かりでしょう。目標を設定し、試行錯誤しながら活動し、達成することで充実感や所属感、仲間意識が高まります。中学校では、体育祭でのブロック別活動で継続的な異年齢交流活動がよく行われますが、可能であれば、文化祭やクラスマッチ、合唱コンクール、総合的な学習（地域との交流活動）等においても異年齢交流活動を広げてみてください。また、清掃活動等の日常生活も活用していきましょう。生徒の自尊感情を高めるためには、あらゆる機会を活用し、長い期間をかけて育むことが重要です。



活動中の教師のスタンスは？

- 見守る
- 不足分をリーダーに助言
- 不満や悩みを聞く
- 励ます
- 発見しようとする
- ほめる・認める



③ グループのルールを決めましょう

グループも一つの社会です。「交通ルールがあるから町を安心して歩ける」と同様に、生徒たちが異年齢で居心地よく活動するためにはルールを作り、意識させる必要があります。そこで、ルールを守ったり、大切にしようとしたりするために自分たちでルールを決めさせてください。「待つ」「笑顔」「認める」「グループ愛」等でもいいでしょう。3年生が決めるのではなく、グループで意見を出し合って、みんなの了解のもと決定です。決定していくプロセスで特に大切なのは、まずは意見を否定しないことです。最初から否定されると前向きな話し合いや活動ができなくなります。そのことを先生方からアドバイスしてください。



④ 2年生が1年生を指導する機会を設定しましょう

生徒たちが3年生になって、いきなりリーダー性を発揮することは難しいことです。3年生に頼らず下級生を指導していくという意識や力を2年生のうちから徐々に付けさせていくことも大切です。



実践例

『2年生による1年生の校歌指導』（直方市立植木中学校）

「校歌指導に向けての目標」「具体的な手立て」「自分の役割分担」を学級会で確認し、特別活動の時間で実施します。中堅学年として、責任と活動の重要性を自覚して思いを伝えようとする2年生、一生懸命にその思いに応えようとする1年生の姿が見られ、わずかな期間で1年生は校歌を覚えることができるそうです。活動を通して、2年生の達成感は大きく、その後の活動に大いに役立ったとのこと。



⑤ 活動後の振り返りで子どもたちの学びを強化しましょう

「生徒たちに～のようになってもらいたい」というめざす姿がゴールであり、異年齢交流活動を仕組むことや活動を終えることがゴールではありません。しかし、活動が終わり、十分な振り返りができないままになってしまうと、せっかく多くの時間や労力をかけたのに、「もったいない」の一言です。活動後にグループの振り返りの時間を設定し、気付いたことを互いに共有し、学びを強化していくことが大切です。

例えば、「活動に際してありがとうと思ったことは？」「活動がうまくいったのはなぜ？」などと問いかけ、各自が人とは違うことを言うようにしておきます。人の意見への否定はなしです。人から認められると嬉しいですし、次も頑張ろうと思います。また、他の意見を聞いて自分が気付かなかったことを学び、次からの活動や学校生活に生かせるようにもなります。特に異年齢で行うことで上下間の信頼関係はより深まります。また、先生からほめられるとより効果的です。